

# 延安解放区における作家の苦悶：丁玲『夜』を中心に

著者	相原 里美
雑誌名	研究論集
巻	93
ページ	21-39
発行年	2011-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1443/00006128/">http://id.nii.ac.jp/1443/00006128/</a>

## 延安解放区における作家の苦悶

— 丁玲『夜』を中心に —

相 原 里 美

### 要 旨

丁玲は、1941年に短編小説『夜』を発表した。この物語の舞台は、共産党の根拠地であった延安解放区の川口<sup>チョアンコウ</sup>という農村で、主人公は共産党の指導員になったばかりの何華明という農民の男である。その他、地主の娘清子<sup>チンズ</sup>、十二歳年上の妻、共産党女性幹部の侯桂英の三人の女性が登場する。物語は、二章構成で、何華明が牛の出産のために自宅に戻った一夜の出来事について描かれている。当時は抗日戦争の只中であり、共産党員である丁玲としては、創作活動を通して、抗日を声高に謳わなければならなかった。しかし、女性解放を目指す文学者としての丁玲は、人々の意識下に潜む旧態依然とした封建的意識を看過することはできなかった。本稿では、「覚醒」したばかりの何華明や三人の女性を通して描かれる、共産党員丁玲の女性解放や文学者としての思想的苦悶に迫りたい。

キーワード：『夜』、女性解放、主体性、覚醒、無自覚

—

丁玲は、抗日戦争が激化していた1941年に、共産党の指導する延安解放区において『夜』という短編小説を発表した。この物語は、丁玲自らが訪れた川口<sup>チョアンコウ</sup>という農村がモデルとなっており、共産党の指導員となった何華明という主人公の農村青年と、何華明を巡る三人の女性が登場する。そこには、村の農民代表の選挙大会の前日、何華明が牛の出産に立ち会うためにいったん家に帰ることを許された一夜の出来事について描かれている。

冒頭に登場する女性は、十六歳の清子<sup>チンズ</sup>である。彼女は、この村の地主である趙培基の娘で、居住している窯洞<sup>セオトン</sup>〔山崖に掘った洞穴式住居〕の入り口で靴に針を刺している。その耳には銀の耳飾りが揺れていた。

何華明の彼女に対する気持ちは複雑で、次のように描かれている。

站在大门口看对山盛开的桃花的是那发育得很好的清子。长而黑的发辫上扎着粉红的绒

绳，从黑坎肩的两边伸出条纹花布袖子的臂膀，高高地举着，撑在门柱上边，十六岁的姑娘，长得这样高大，什么不够法定的年龄，是应该嫁人了的啊！

在桥头上分开了手，大家都朝南走，只有何华明独自往北向回家的路上。他还看见那倚在门边的粗大姑娘，无言的眺望着辽远的地方。一个很奇异的感觉，来到他心上，把他适才在会议上弄得很糊涂了的许多问题全赶走了。他似乎很高兴，跨着轻快的步子，吹起口哨来；然而却又忽然停住，他几乎说出声音来的那么自语了：

“这妇女就是落后，连一个多月的冬学都动员不去的，活该是地主的女儿，他妈的，他赵培基有钱，把女儿当宝贝养到这样大还不嫁人……”<sup>1)</sup>

門のところに立って桃の花が咲き乱れている向かいの山を眺めているのは、「とてもよく身体の発育した」清子である。長くて黒いおさげに桃色のリボンを結び、黒い袖なしの下から縞模様の長袖を着た腕が出ている。その腕を高く上げ、門柱の上の方を押さえて柱に寄りかかっている。その大きく成長した身体を見ると、十六歳で法定の年齢に達していなくても、嫁に行くべきではないか、と何華明は思った。

何華明は橋のたもとで他の指導員たちと別れ一人家路に着くと、もう一度清子に眼を向けた。すると、先ほどまで頭の中にあった会議の席で議論されていた多くの問題が、頭の中から吹き飛ぶほどの「奇妙な感覚」に囚われる。彼の心の中で、清子が無意識的性衝動の対象となった瞬間である。年若くふくよかで小奇麗な格好をした娘を、浮き立つ気持ちで眺めた。先ほどまでの重苦しい気持ちとは打って変わり、足取りも急に軽くなり、今にも口笛を吹き出しそうだった。

しかし、彼はふいに立ち止り、すぐさま気持ちを切り替えた。清子は共産党が指導している冬期学校にも通わず、嫁にもいかず、ただ無自覚に生活している「落伍」した女なのだ。いつまでも娘を嫁に出さない地主である父親の趙培基に対しても、何華明は不満を抱くのであった。この何華明の複雑な気持ちについて、単元は次のように解釈している。

这句自语，愈发显出的是何华明潜意识深处对年青姑娘清子的一丝男性的欲念。作者正是从这种看似不应该产生的欲念开始切入何华明的意识深层，层层剖示他幽深躁动、充满烦恼和痛苦、同时也充满期冀的心灵世界的。<sup>2)</sup>

丁玲は男の欲望といった切り口から何華明の意識の奥深くにまで入り込み、彼の心底で慌しく揺れ動く、苦悩と苦痛、さらに期待に満ちた精神世界を分析しているのである。何華明の気持ちのなかでは、容姿のいい若い娘に触れたいと思う本能と、冬期学校にも行かず無自覚に生きている女を落伍者と呼ぶ先進的な思考が、交互に見え隠れしている。

何華明は、もはやただ地主の言いなりになって田畑を耕して生きてきた、無自覚な農民の何華明ではない。覚醒していなかったこれまでの何華明なら、地主の娘のことを「落伍」していると思うことはない。「落伍」という言葉は、何華明にとって共産党の会議で聞きかじった新しい言葉である。彼はもうただの農民ではなく、人民を解放するべく立ち上がった共産党の指導員なのだ。指導員は、欲望のまま、本能のままにふるまうわけにはいかない。落伍している人民を解放しなければならぬ。今、彼は自分の意見をしっかり持った覚醒した共産党の指導員になろうと懸命になっているのだ。

しかし、その共産党の指導員としての先進的な思考も、女は年頃になれば必ず嫁に行かなければならぬ、という封建的思想の呪縛からは抜け出せていないのが現状である。何華明は、共産党の指導員として自身が何をすればいいのか、どのように人民を解放していかなければならぬのか、正直なところ深くはわからないでいたのである。

けれども、やはり人民を解放する覚醒した人間であらねばならないということは、頭ではわかっている。だからこそ共産党のために役に立たなければならぬ、と自分の農地や家畜を放置したままで、指導員として会議に出席し、人民のために奔走しているのである。

また、清子という女性に着目してみると、彼女は地主の娘であり、金銭的には相当恵まれているものと思われる。彼女が身にまとっているのは、黒い袖なしに縞模様の長袖で、装飾品も銀の耳飾りと桃色のリボンである。

黄正林によると、抗日戦争期の陝甘寧辺区の庶民の衣食住は、相当厳しいものであった。もともと土地自体が養分の少ない痩せた土地であり、自然環境も劣悪であったため、食料は麦や、粟、キビなどの雑穀しかとれない。食事も一日二回しかとれないこともあり、肉類に至っては、一年に三、四回しか食べられないほどであった。衣服に関しても、木綿か古びた羊の皮しかない。さらに、国民党が解放区に対して経済封鎖政策を行っていたために、外部からの援助を断たれてしまっていた。それで、食べるにも着るにも非常に困難な状況に陥っていた。<sup>3)</sup>

このような状況から考えると、清子の服装や装飾品は、かなり高価な贅沢品であったものと思われる。このように金銭的な余裕があり、時間的にも余裕があるはずなのに、清子は冬期学校に通おうとしない。父親の趙培基も娘を通わせようとしていない。そんな清子を見て、何華明は「落伍」していると思うのであった。

ここには、無自覚なただの農民でしかなかった何華明が、娘に対して「奇妙な感覚」に囚われつつも、覚醒した共産党の指導員へと成長していく過程での心の葛藤や苦痛、そして古い封建的意識から解放されて新しい思想へと向う過渡期の混乱した意識世界が、精細に描かれているのである。

二

何華明が帰宅すると、そこには、彼より十二歳も年上の妻が、何華明の帰りを今か今かと待ち構えていた。彼女には、何華明に対する不満が鬱積している。食べるにも着るにも困るほど貧窮しているにも関わらず、夫は、妻には意味のわからない「工作」という仕事へ出かけていく。家に帰ってこない日が続き、草刈りもしてくれなければ、畑も耕さない。仔牛を産もうとしている親牛の面倒もみない。以前はよく口喧嘩をしたのだが、最近は口数さえ減ってくる始末である。

もともと、この二人の間には、息子と娘の二人の子供がいた。しかし一歳と四歳の時に二人とも亡くなってしまった。そして、もう妻は子供を産める年齢ではなくなっているのである。妻は、自分が何華明を満足させることができないことに気づいていた。夫のために子供を産むこともできなければ、もはや夫に欲望を抱かせることすらできないのだ。それゆえ、自分にも嫌気がさしている。彼女はただ平穏な生活を求めているだけだが、どうすれば生活が安定し、どうすれば夫が自分にかまってくれるかもわからない。

夜更けになって、何華明が牛舎から戻ってくると、妻は片づけを済ませていたが、まだ眠ろうとはしていなかった。ただ黙って夫を見つめているだけだ。何華明は、妻が何か言いたいことを我慢しており、彼女の皺の一筋一筋には、ただならぬ不満が刻み込まれていることを感じ取っていた。しかし、事を荒立てたくなかったので「あーあ、疲れた」と言って床に入った。

然而有一滴什么东西落在地下了，女人在哭，先是一颗两颗的，后来眼泪便在脸上开了许多条河流不断地流着。微弱的麻油灯，照在那满是灰尘的黄发上，那托着腮颊的一只瘦手在灯下也显出怕人的苍白，她轻轻地埋怨着自己，而且诅咒：

“你是该死的了，你的命就是这样坏呀！活该有这么一个老汉，吃不上穿不上是你的命嘛……”

他不愿说什么，心里又惦着牛，便把身子朝窗外躺着。他心里想：“这老怪物，简直不是个‘物质基础’，牛还会养仔，她是个什么东西，一个不会下蛋了的母鸡。”什么是“物质基础”呢，他不懂，但他明白那意思就是说那老东西已经不会再生娃的了，这是从副书记那里听来的新名词。<sup>4)</sup>

我慢していたものが一気に噴き出したかのように、彼女の眼からは涙が川のようにとめどなく流れている。胡麻油の灯りが、何華明の妻の埃まみれの黄ばんだ髪をほんのり照らし、手はやせ細っていて、灯りのもとでは驚くほど蒼白かった。とうとう口を開いたかと思うと、「死んじまえばいいんだ、運がこんなに悪いなんて！ こんな男と一緒にあって、食うにも着るに

も困って、これが運命なんだ……」と、自分にぶつぶつと恨み言を言い始めるのであった。

それに対して、何華明は何も話す気になれず、ただ心の中で「この化け物め、まるで物質基礎でねえか。牛ならまだ子供を産めるが、あいつときたら、卵も産めなくなった雌鶏じゃねえか」と思う。一回りも年上の妻は、もう子供も産めない、何の役にも立たない。「物質基礎」とは、彼が副書記から聞きかじった新しい言葉である。何華明は、意味はよくわかっていないのだが、わかった気になって使っているのである。もう子供すら産めなくなった彼の妻は、人間らしい人間ではなく、物質そのものにすぎないのだ。

何華明は、結婚した当初は妻との年齢差も気にならず、彼女に対して悪い印象もなかったし、彼女との間には子供を二人もうけることができた。しかし、子供は二人とも死んでしまった。彼は自分を手伝ってくれる子供が欲しいと思っているが、もはや一回りも年上の妻に欲望を感じることができず、妻の年齢からいって子供ができる希望はすでに断たれてしまっている。その上、毎日恨み言を聞かされるとあっては、自分のほうが不満をぶちまけたいくらいだった。

何華明とその妻は、お互いに不平不満を感じているのだが、妻が恨み言をぶつぶつ言うのは、必ずしも何華明を憎んでいるからでも、嫌っているからでもない。妻にとって何華明は、生活の支えとなる重要な存在である。夫の気持ちが離れている事に気づき、その重要な存在を失いそうになっていることはわかっているのだが、無自覚な妻にはどうすれば現状を変えることができるのか、考えることすらできないのである。だからこそ、恨み言をつぶやくほかないのである。まして、妻は夫の「工作」の意味がわからないし、何華明もうまく説明しようとしないうし、できない。そこが、妻の不満を帳消しにできない何華明の弱点であった。

何華明は、共産党の指導員として立ち上がることができて、覚醒への第一歩を踏み出している。農村が遅れていることや、人民や女性が解放されていないことを十分理解している。これらを解決するには、自らが主体的意思をもって積極的に変えていかなければならず、誰にも頼ることはできないことも分かっている。この無自覚な妻に救いの手を差し伸べ、妻に「工作」の意味を理解させられるのは、夫である自分しかいないのだ。

けれども、結局、何華明にできることといえば、共産党の会議の席で聞きかじった「落伍」や「物質基礎」といった新しい言葉を使って妻を見下げるのが精一杯で、何華明自身、一番身近にいる妻でさえ救えないのである。

ここに登場する妻は、丁玲がこれまで描いてきた『莎菲女士の日記』<sup>9)</sup>の莎菲や、『霞村にいた時』<sup>9)</sup>の貞貞とも異なる。莎菲は、病気がちな中産階級の娘であったが、性的欲求を満たすために、自ら積極的に行動を起こした。また、貞貞は、日本軍に辱めを受けながらも、自分の意思を持って積極的に共産党に協力し、人々の封建意識と闘い続けた。それとともに、二人はいずれも自分の中にある旧い意識に立ち向かい、自己を解放し、人間らしい人間になろうと自らを奮い立たせていたのである。

一方、『夜』に登場するこの妻は、江上幸子が「丁玲がはじめて普通の妻、しかも、中国で圧倒的多数を占める農村家庭の妻を扱った作品である」<sup>9)</sup>と指摘するように、当時の農村家庭のどこにでもいる典型的な農村女性であった。彼女たちは、丁玲がこれまで創作活動を通じて描いてきた自我に目覚めた女性たちとは異なり、まだ覚醒することの意味すらわからず、誰にも救われることなく封建的な社会のなかに取り残されていたのだ。だからこそ、丁玲はあえてこの妻に名前を与えていないのである。このような妻は、とりたてて焦点をあてなくとも、どこでも見つけられる存在なのだ。実際にこの圧倒的多数を占める封建社会に取り残されたままの農村家庭の妻たちを目の当たりにすると、彼女たちこそ解放されなければならない、と丁玲は痛感したのである。この時になって、丁玲はようやく真の意味で社会全体に眼を向け始めたのである。

また、底辺に生きているこの妻を地主の娘である清子と対照的に描くことで、当時の農村女性の貧困や現状をリアルに表現しているといえるのである。

### 三

妻はいっこうに泣きやまないばかりか、いっそう激しく泣きじゃくり、手当たり次第に物を投げつけてくる。そこで、何華明はとうとう離婚を考えるようになる。家財道具をすべて妻にくれてやり、自分は布団一組と着替えが二三着あればそれでいいとさえ思えてくる。

ついに我慢の限界を超えた何華明は、妻の恨み言から解放されるために再び牛舎を見に行くと、そこで隣家の女性幹部、侯桂英に出くわした。

だが、これは偶然ではない。最近、何華明が牛に餌をやりに来るたびに、侯桂英がわざわざ何華明に近づき話しかけてくるのだった。

他刚要离开牛栏的时候，一个人影横过来，轻声的问着：“你的牛生存了没有？”这人一手托着草筐，一手撑在牛栏的门上，挡住他出来的路。

“是你，侯桂英。”他嘎声地说了，心不觉的跳得快了起来。

侯桂英是他隔壁的青联主任的妻子，丈夫才十八岁，而二十三岁了的她却总不欢喜，她曾提出过离婚，她是妇联会的委员，现在被提为参议会的候选人。

这是第三次还是第四次了，当他晚上起来喂牲口时，她也跟着来喂，而且总跟过来说几句话，即使白天见了，她也总是眯着她那单眼皮的长眼笑。他讨厌她，恨她，有时就恨不得抓过来把她撕开，把她压碎。

月光落在她剪了的发上，落在敞开的脖子上，牙齿轻轻地咬着嘴唇。她望着他，他也呆立在那里。

“你……”

他感到一个可怕的东西在自己身上生长出来了，他几乎要去做一件吓人的事，他可以什么都不怕的，但忽然另一个东西压住了他，他截断了她说道：

“不行的，侯桂英，你快要做议员了，咱们都是干部，要受批评的。”于是推开了她，头也不回的走进自己的窑里去。<sup>8)</sup>

侯桂英は、共産党の指導する青年連合会主任の妻であり、自分も婦女連合会の委員をしている。さらに参議会の候補者に挙げられている。彼女は二十三歳だが、夫はまだ十八歳になったばかりだ。彼女はこの年下の夫が好きではなく、離婚を切り出したことさえあった。

彼女は何華明に会うと、昼間でさえその切れ長の眼で微笑みかけ、夜に至っては、何華明が夜に牛のえさをやりに来る時間をわざわざ見計らって、二言三言話しかけてくるのだ。もう、今回は三回か四回目だった。何華明は、そんな彼女が煩わしくて憎かった。時には捕まえて引きさき、押しつぶしたくて堪らなかった。

だが、何華明がそのようなことを考えていても、侯桂英は動じることはなかった。彼女は、何華明の行く手をふさぎ、軽く前歯で唇を噛んで、何華明をじっと見つめ、誘うのだ。月の光りが彼女の断髪や襟元の大ききはだけた首筋を照らしている。

何華明は、そんな侯桂英の誘いに、自分の身体の中から「恐ろしいもの」が生じ、今にも「人が驚くような事」をしでかしそうになった。しかし、「もう一つのもの」に阻まれ、結局、「だめだ、侯桂英、あんたはもうすぐ議員になるんだろう。俺たちは幹部だし、批判されちまう」と彼女を押しつけて、振り返ることもなく自分の窯洞に戻るのであった。

何華明の本能の部分では、「恐ろしいもの」が沸き立っている。それは、年若い女に触れたと思う性衝動である。しかも相手は自分を好いているばかりか、向こうから誘ってくるではないか。あの年老いた女房なんて、いっそのことさっさと別れてしまっ、この女と一緒にあって、また子供を産んでもらったらどんなに幸せかわからない、と思うのだった。

しかし、そのような性衝動は「もう一つのもの」に阻まれる。それは、何華明の理性的なもので、何華明の旧い道徳意識から生まれている。女とはつましく家で夫に仕えなければならぬのに、侯桂英という女は夫のある身でありながら、夜中に他の男を誘いに来るような不届きな奴だ、と思うのだ。さらに指導的立場にある自分が、道徳規範に違反する行動をとってはならない、と彼の理性的なものが彼の性衝動を制止したのである。

秦弓は、「もう一つのもの」とは、「幹部として批判を受けることへの恐れや、男として家庭を守らなければならない責任感といったものであるかもしれない」と指摘しつつ、次のようにも述べている。



那“另一个东西”是什么？是因为身为干部、怕受批评？是所谓男子汉的家庭责任感？二者也许都有，但更为深层的恐怕还是根深蒂固、已渗入骨髓的封建贞操观。这是一个强烈的反讽：本来最受贞操观桎梏的是女性，但现在女性觉醒了、解放了，而男性却萎靡不振、龟缩回去。<sup>9)</sup>

秦弓によると、さらに深層にあるのは「根深く、骨髓にまで沁み渡っている封建的倫理意識」である。これまで、旧い貞操観の桎梏から抜け出せないでいたのは、女性のほうであった。にもかかわらず、ここでは女性の侯桂英のほうが、旧い貞操観から「覚醒し、解放されている」のに対し、男性の何華明は、旧い倫理意識に囚われ、「萎縮して、逃げ腰になってしまっている」というのである。

たしかに、何華明は、旧い倫理意識に囚われ、逃げ腰になっている。しかし、侯桂英は旧い貞操観から「覚醒し、解放されている」というよりはむしろ、無意識のうちに本能的に自我を解放しようとしているのである。このように本能的に性的欲求を満たそうとする積極性や行動力は、なんとかして意中の男性と口づけを交わそうとした『莎菲女士の日記』の莎菲の行動力に通じるものがある。

莎菲は、自分の性的欲求を満たしたいという本能と、女性から愛を打ち明けるとはしたくないことであるという理性的な考えの間で葛藤していた。それでも何とかして自我を解放するため、恋い焦がれたシンガポール人の凌吉士と口づけを交わすという目的のために、彼に英語を教えてほしいと頼んだり、彼の寄宿舎の近くに引っ越したりして、彼と会う機会を増やそうと画策した。しかし、彼との口づけを交わした瞬間に、自分が蔑むべき行為を行ったことに気付いた。なぜなら、凌吉士が自分を自立した一人の人間として認めていなければ、自分はいつまでたっても覚醒した人間たり得ず、真の意味で自我を解放することができない、と莎菲は悟ったからである。

侯桂英が真の意味で旧い貞操観から覚醒しているのであれば、年下の夫との離婚をとっくに成立させているはずである。離婚を切り出したものの、夫が青年連合会主任であることや自分自身が女性幹部であり参議会の候補者という立場上、離婚には至っていない。だからこそ、その反動として、本能的な衝動が無意識のうちに理性的な部分を押しつけ、強烈な原動力となって、彼女に積極的に男を誘うという行動をとらせたのである。

侯桂英について、単元は次のように論じている。

平心而论、侯桂英并不是一个过于轻浮的女人，她也有着自己的家庭烦恼，二十三岁的她嫁给了一个十八岁的小丈夫，两人感情不融洽，“她曾提出过离婚”，但还没有被批准。在工作中，与何华明萌生了感情，并主动地表露这种感情，也是人之常情。在一个文明进步

的社会里，每一个人都有选择自己人生的权利。何华明对侯桂英情感的拒绝，既是看重自己的干部身份对自己严格要求的结果，又带有对旧意识、旧道德妥协的成份。读到这里，我们真不知是应该为何华明严以律己、能够用道德约束自我的品行心生敬慕，还是该为他在个人婚姻生活中确实无爱却还要维持下去的无奈产生悲哀和同情。<sup>10)</sup>

単元は「公平な見方をすれば、侯桂英は決して軽薄すぎる女性ではなく、彼女自身も家庭における苦悩を抱えている」と述べている。侯桂英は年下の夫とうまくいかず、離婚を切り出すものの、まだ認められていない。彼女が何華明に恋心を抱き、積極的に気持ちを表したのも人情の常であり、解放された社会においては、誰しも自分の人生を選択する権利があるのだ。侯桂英の何華明に対する行為は、家庭の苦悩から自我を解放したいと望む彼女の心の奥底に潜在する本能的なものが、彼女自身を突き動かしてとった行動だと考えられるのである。しかし、侯桂英の本能的な衝動に対して、何華明は理性的な「古い倫理意識」によって阻んでしまう。結局、何華明は侯桂英を選ぶのではなく、妻と暮らしていく道を理性的に選択するのである。

これまでの丁玲は、意識的あるいは潜在的に自我解放を目指す女性<sup>11)</sup>を多く描いてきた。何華明は、心の片隅でこのような覚醒し始めた侯桂英を伴侶とし、共に積極的に工作をしていくことを望んでいたに違いない。しかし、共産党の指導員という立場にある以上、弱い立場にある妻を見捨てるわけにはいかないのである。ここで夫に見放されてしまえば、妻は生きる術を失ってしまうのだ。

一方、この選択には、何華明の自己犠牲という問題もはらんでいる。単元が「自らを律する品行方正な行為であると敬意を払うべきなのか、それとも、愛のない結婚生活を続けていかなければならない悲しみに同情するべきなのかかわからない」と指摘しているように、何華明が妻を選んだのは苦渋の選択そのものであった。

#### 四

女性幹部の侯桂英の強引な誘いを振り払った何華明は、自分の窯洞に戻り、先程の事を他人事のように思い出して満足していた。そして、妻に「もう寝ろよ。仔牛はまだ生まれねえ。たぶん明日だろうよ」と、優しく声を掛けている。

彼は、自分が若い女に誘われるほど魅力が残っていることを確認して満更でもなく、村の幹部として、妻ある身として分別を守れたことに満足していたのだろう。そして、「この老いぼれは結局だめだけど、まあいい。飯でも炊かせておけばいい。離婚となったらみっともねえ」と、このまま年老いた妻と暮らしていくことを決意したのだった。

“牛又要侍候了……”但他已经没有很多时间来想牛的事，他需要睡眠，他合着眼，努力去找瞌睡，却只见一些会场，一些群众，而且听到什么“宣传工作不够罗，农村落后呀，妇女工作等于零……”等等的话。他想到这里，就免不了烦躁，如何能把农村弄好呢，这里没有做工作的人呀。他自己是个什么呢？他什么也不懂，他没有住过学，不识字，他连儿子都没有一个，而现在他做了乡指导员，他明天还要报告开会意义……

窗户纸在慢慢变白，隔壁已经有人起身了；何华明却刚刚沉入在半睡眠状态中，黄瘦的老婆已经睡熟了，有一颗眼泪嵌在那凹下去了的眼角上。猫睡在更侧边沉沉地打着鼾。映在曙光里的这窑洞倒也显得很温暖很恬适。

天渐渐的大亮了。<sup>12)</sup>

翌日の選挙大会のため、また、牛の出産に立ち会うために早く休まなければならないと思うのだが、何華明の閉じた眼には、会議の席しか見えてこない。そこで、彼は「宣伝工作が不十分だ、農村は落伍している、婦女工作などゼロに等しい……」という声を耳にする。彼が毎日の会議で聞かされ、また彼自身が考えている、解決策を見い出さなければならない事柄である。

何華明にとって、「農村は落伍している」という言葉は、胸に突き刺さる思いだ。農村が落伍しているからこそ、自分が指導員となって農民を指導する立場になったのだが、肝心の自分の土地は、ほったらかしになったままである。選挙の仕事が終わったら、すぐにでも自分の土地に帰りたいと思っているのだ。

また、「婦女工作などゼロに等しい」という言葉は、皮肉にも、自分の妻に当てはまっている。何華明は学校に通ったこともなく、字も知らない。覚醒したばかりの未熟な若者である何華明にとっては、共に戦う同志が必要であり、無自覚な妻よりも覚醒した女性幹部の侯桂英を選びたい気持ちが強い。しかし、人民を解放すべき共産党の指導員としては、自分の妻をむげに見捨てるわけにはいかないのである。

窓の障子が明るくなってきた時、隣家ではすでに起き出していた。何華明はうつらうつらし始めたところであり、黄色くしなびた妻はすっかり寝入ったままである。隣家はおそらく日常に戻った侯桂英だ。この光景が、侯桂英や何華明たちの現状をそのまま象徴しているのである。明るい未来の光が見えだすと、侯桂英はすぐに起き出し、頭を切り換えて解放のための活動を始めている。侯桂英は女性幹部として人民のために「工作」をするが、同時に自我解放のための本能的なエネルギーも持ち合わせている。それに対し、何華明は未来の光に気付きはしているものの、まだ眠りについたばかりで、ただひたすら頭の中で「工作」について考えを巡らせているに留まっている。一方、無自覚な妻は、未来の光に気づくことなくまだぐっすり眠ったままなのである。

しかし、何華明と妻のいる窯洞に射し込んだ明け方の光りは、とても暖かく心地よいもので

あった。そして、空は次第に明けわたろうとしていた。

この場面に関して、江上幸子は次のように述べている。

丁玲は作品の最後に「夜は明けようとしていた」と書くものの、作中に名前ももたない女房は「独立」自主の精神ももてずに、「苦勞の多い」家庭、古い価値観が色濃いままの家庭に取り残されてしまっている。「人民」たりえる夫に対し、女房は「落伍者」として「犯罪者」扱いもされかねず、共産党治下にこれから多く生まれる普通の「妻」が幸福を得ていくようには見えない。この小説には『夜』の「妻」たちの深い悲しみに対する同情と、広範な女性が真に解放されることの至難さに対する慨嘆が込められているといえよう。<sup>13)</sup>

江上の述べるように、妻は「落伍者」というレッテルを貼られ、夫や隣家の女性幹部に救われることもなく、「古い価値観が色濃いままの家庭に取り残されて」おり、無自覚のまま覚醒できずに旧社会に置き去りにされかねない。

しかし、丁玲はこの「落伍者」というレッテルを貼られた妻に救う手だてを与えていないわけではない。何華明が離婚を思いとどまった理由は、落伍している妻を不憫に思ったからではなく、離婚騒ぎなどみっともないと思う旧い道德意識があったからかもしれない。しかし、どのような理由があったにせよ、何華明は妻が最も恐れている離婚を回避し、この妻に「妻」という立場を残すという形で救いの手を差し伸べ、妻に生存の路を与えているのである。もし本当に離婚されてしまったら、何華明の妻は生活の手段を失い、生きていくことさえままならなくなっていただろう。

『韋護』<sup>14)</sup>の韋護が「工作」に専念するために恋人の麗嘉を見放したのに対し、何華明は、結局、何も見捨てることはなかったのだ。彼は、農民として働くことも、工作をすることも、無自覚な妻と暮らし続けることも、放棄していないのだ。

一方、侯桂英は本来ならこの妻に対し、女性幹部として理性的に救いの手を差し伸べて当然である。ところが、何華明に色目を使って誘い、妻から何華明を奪おうとしている。彼女は本能のまま男を誘う身勝手な女性幹部であるが、女性が解放されるためには、彼女のような肉体の奥底から湧き出てくる強い自我意識という原動力が必要なのである。覚醒した男性が、どれほど無自覚な女性に自覚を促しても、女性自身が主体的に行動を起こさないと、いつまで経っても覚醒することはできない。ましてや自我を解放することはできないのである。

## 五

丁玲は、1942年に『三八節に感有り』という散文を発表している。

延安解放区の農村で、丁玲は圧倒的多数を占める農村女性を解放する必要性を痛感した。無自覚な農村女性を解放できるのは、古い封建的思想から覚醒した延安解放区の共産党員たちである。ところが、もっとも解放されていると思われた延安解放区的女性や指導的立場の男性たちでさえ、古い倫理意識に強く囚われていたのである。

このことについて、中島みどりは次のように述べている。

階級論的な社会革命にめざめる以前に性的平等と解放を求め、上海や北京で、長らく「解放された」知的エリートたちの間で暮らしてきた丁玲にとって、陝北や山西の人びとの“封建的”な遅れた意識は驚くべきものだったが、それ以上に我慢ならなかったのは、現に解放事業の中心となっている人びと、上層幹部たちの間にすら、旧態依然たる男女関係と性差別の意識があることだった。「三八節に感有り」はこのことを批判して書いたものである。<sup>15)</sup>

中島が指摘するように、上海や北京で知識人たちの社会で生きてきた丁玲は、女性の「性的平等と解放」を求めて、創作活動を続けてきたし、そのような女性を描き続けてきた。しかし、延安に到着した丁玲は、解放区の農村で何華明の妻のような女性たちを目の当たりにして、その封建的な遅れた意識に驚愕した。社会革命に目覚めていた丁玲は、社会全体を解放するということの至難さを改めて痛感したのである。

『三八節に感有り』には、解放区的女性たちの落伍や婚姻問題に対する、丁玲の落胆や憤慨、そして女性たちへの激励といった様々な思いが込められているのだ。

冒頭で、丁玲は「婦女という言葉は、いつの時代になれば特別祝されなくなり、とりたてて取り上げる必要がなくなるのだろうか」<sup>16)</sup>と問題を提起している。

王周生は、この言葉について、次のように述べている。

强调“妇女”两个字，表示男女差别的客观存在，这正是妇女还没有被解放的证明，丁玲提出的问题是多么的尖锐！如果妇女不是作为一个人，而是作为第二性受到歧视，那就谈不上妇女个人的自由和解放。解放区，应该有着以革命和人的真正解放为目标的民主。虽然当时有着比妇女问题更重大更紧要的民族战争的任务，但是，丁玲认为解放区应该从日常生活中，从每个革命者平时的行动和实践中消除性别歧视和偏见，对女性多一点同情和尊重。我们不仅在阶级上消除差别，也应该在性别上消除观念上的差别，追求真正的自由和平等。<sup>17)</sup>

婦女という二文字が強調されるということは、男女差別が客観的に存在していることを示し、まさに女性が未だに解放されていないという証明であり、丁玲の問題提起は非常に鋭い、と王周生はいう。この言葉には、丁玲の女性解放が思うように進まないいらいらと落胆の気持ちが強く込められているのだ。もちろん、当時の社会状況から言って、女性問題よりももっと重要で急を要する抗日戦争の任務があったことは間違いない。しかし、もし女性が一人の人間としてではなく、第二の性として差別を受けるなら、女性個人の自由や解放など語れない。解放区の革命者が一人ひとり自覚を持って性別による差別と偏見をきっちりとなくし、女性に対してもっと同情し尊重する気持ちを持たなければ、本当の自由と平等は得られないし、社会全体を解放することもできない、と丁玲は考えていたのである。

また、解放区の人々の離婚の原因について、丁玲は次のように言及している。

而离婚的口实，一定是女同志的落后。我是最以为一个女人自己不进步而还要拖住她的丈夫为可耻的，可是让我们看一看她们是如何落后的。她们在没有结婚前都抱着有凌云的志向，和刻苦的斗争生活，她们在生理的要求和“彼此帮助”的蜜语之下结婚了，于是她们被逼着做了操劳的回到家庭的娜拉。她们也惟恐有“落后”的危险，她们四方奔走，厚颜地要求托儿所收留她们的孩子，要求刮子宫，宁肯受一切处分而不得不冒着生命的危险悄悄地去吃堕胎的药。而她们听着这样的回答：“带孩子不是工作吗？你们只贪图舒服，好高骛远，你们到底做过一些什么了不起的政治工作！既然这样怕生孩子，生了又不肯负责，谁叫你们结婚呢？”于是她们不能免除“落后”的命运。一个有了工作能力的女人，而还能牺牲自己的事业去作为一个贤妻良母的时候，未始不被人所歌颂，但在十多年之后，她必然也逃不出“落后”的悲剧。即使在今天以我一个女人去看，这些“落后”分子，也实在不是一个可爱的女人。她们的皮肤在开始有褶皱，头发在稀少，生活的疲惫夺取她们最后的一点爱娇。她们处于这样的悲运，似乎是很自然的，但在旧社会里，她们或许会被称为可怜，薄命，然而在今天，却是自作孽，活该。<sup>18)</sup>

離婚の原因はたいてい女性の「落伍」にあり、落伍してしまった妻が、自分の主体性を取り戻すこともなく、夫を引き留めることは恥ずべき事である。しかし、それと同時に、どうして彼女たちが落伍してしまったのかを見てやらなければならない、と丁玲は述べている。

解放区の先進的な一部の女性は、一度は理想を掲げて政治工作に携わって奮闘していたが、お互いに助け合おうという甘い言葉を男性と交わして結婚し、家庭に入り主体性を失った「家に帰ったノラ」となることを強要される。落伍しまいと女性も必死になって、子供を託児所に預けたり、堕胎薬を飲んだりするが、今度は母親の責任を負おうとしない、と男たちのそしりを受け、結局落伍の路へと向かってしまう。

また、有能な女性が自分の仕事を犠牲にして自ら良妻賢母になれば、一度は称賛されるかもしれないが、十年後にはやはり落伍の運命からは逃れられない。皺が増え髪は薄くなり、愛嬌さえ失ってしまうのだ。指導的立場の夫は、共に戦える同志として伴侶を選んだはずなのに、妻が落伍してしまっただけで、自分の重荷にしかならない。だから、夫は離婚を切り出すのである。女性たちは、強いられてあるいは自ら良妻賢母になったとしても、結局、落伍の運命を免れないのである。丁玲は、落伍した彼女たちのことを「旧社会なら憐れで悲運だと言われたかもしれないが、今となっては、自業自得なのである」と述べている。

一度は覚醒した女性が、なぜまた主体性を失い、無自覚な女性に成り下がってしまうのか。ポーヴォワールは女性が主体的な意思を持たず「他者」<sup>99</sup> でありつづける理由の一つに、女性の「共犯性」を挙げている。

女を〈他者〉と定める男は、女の奥底にひそむ共犯性に気づくはずである。このように、女は自分を主体として主張しない。それは、そのための具体的な手段をもっていないからであり、自分を男に結びつけている絆を不可欠のものと感じ、その絆の相互性を認めていないからであり、たいていは〈他者〉という自分の役割に満足しているからである。<sup>99</sup>

女性は無自覚のまま「他者」として生きることには反逆せず、男性に甘えて男性の世界に取り込まれ、その共犯者となってきた。なぜなら、男性の共犯者として無自覚に生きていく方が、男性から経済的支援を受けられて、人間として最低限の生存が保障されているからである。

『夜』の妻が、夫の「工作」が理解できず、不運な人生を夫のせいにして不満を募らすのは、夫に一方的に結びつけている絆を不可欠のものと思い込んで、夫の共犯者となり、その無自覚な自分の立場に甘んじているからである。

一方、解放区の一部の先進的な女性たちの心底にもこの「共犯性」が潜んでいる。彼女たちにとって主体として生きることが、並大抵の努力でできることではない。わざわざ自分の中に潜む封建的道德意識と格闘し、周りの男性や女性のそれと戦い、結婚や出産を強要されて仕事を続けていくよりも、良妻賢母として夫に仕え無自覚に「他者」として生きていく方が、実存の不安と緊張を避けることができ、よほど楽に生きていけるからである。そうして彼女たちは、「覚醒」から再び「無自覚」へと落伍していくのである。

とはいえ、具体的な手段を持ち合わせていない無自覚な女性は、なかなか自らを主体として立てることができない。また、解放区の覚醒した女性たちも、時代を超えたものでもなければ、理想的なものでもなく、まして鉄でできているわけでもない。丁玲も自分が女だから女性の欠点は他の人よりわかるし、女性の苦しみはもっとわかっている。女性が仕事を続けて行く中で様々な困難にぶつかり、いずれまた男性の共犯者となって主体性を失い、「他者」へと落伍し

てしまう可能性は十分にある。女性が男性の共犯者という立場から脱却し、覚醒に向けて歩みだすのは至難の業であり、具体的な支援が必要不可欠となる。丁玲は、これまで主犯者となってきた男性にこそ、女性に救いの手を差し伸べてほしいと願っていたのである。

さらに丁玲は、解放区の女性に対して「世界に無能な人間などおらず、みな一切を獲得する資格を持っている。だから女性が平等を勝ち取るためには、まず自らが強くならなければならない」<sup>21)</sup>と、自覚を促している。真の解放を望むのであれば、男たちの共犯者であり続けてはならず、どんな苦勞があろうとも自らを奮い立たせ、強い意志を貫かなければならないのだ。

しかし、延安解放区における丁玲のこれらの作品や主張は、毛沢東に「延安文芸座談会」で徹底的に批判されることとなった。

## 六

丁玲が共産党に入党したのは、1932年のことである。

これまで、丁玲は、一途に女性の個人主義的自我の解放をテーマに作品を書き続けてきた。創作活動を通して社会を変革し、人々を旧い道徳意識から脱却させることができれば、共産黨員になる必要はないと考えていた。

しかし、丁玲は作家活動だけでなく、政治活動にも足を踏み入れることを選択した。丁玲が政治活動に近づいていったことについて、中島みどりは「国民党の反動支配と、日本の対華侵略による民族的危機という社会情勢に促されてであるのはいうまでもないが、その直接の契機はやはり最も身近な存在、愛人胡也頻の殉難であったに違いない」<sup>22)</sup>と述べている。丁玲が、入党直前の1932年1月18日に起こった日本軍による上海事変や、国民党により繰り返される紅軍掃討作戦を目の当たりにして、民族的危機を感じていたことは間違いない。また、共産党入党の直接の契機が、愛する胡也頻の処刑であったことは、紛れもない事実であろう。社会情勢に促されて革命へと踏み出そうとしていた矢先に、胡也頻が国民党に処刑されたのである。最愛の夫であり、最も頼れるよき理解者であった胡也頻を失ったのだ。これは、志をともにしていた戦友を失ったと同じことである。これまで二人で歩んできた道りを今度は一人で歩まなければならないようになった丁玲は、作家個人の力量に限界を感じていたに違いない。

丁玲は、一度入党を決意すると、今度は「党という機械のネジ」となって、党のために働きたいと考えるようになっていった。<sup>23)</sup> 共産党という大きな組織に属して、社会全体を解放しようと望むようになっていたのである。つまり、社会全体を解放することが、個人や女性を解放することに繋がるかと考えるに至ったのだ。

しかし、丁玲が共産黨員になるということは、今まで作品を書くことで表現してきた自己実現、すなわち女性の自我解放の欲求を一度捨て去り、まずは自己を犠牲にして、社会全体のた



めに奉仕しなければならないことを意味している。それほどの覚悟を持って、丁玲は自分の歩む道を、ぐっと政治活動へと延ばしていったのだった。

共産党入党後すぐの1933年、丁玲は国民党に誘拐され、南京で約3年もの間軟禁生活を送った。そこから何とか抜け出すことに成功し、希望をもって延安解放区に向かったのだが、丁玲を待ち構えていたものは、理想とはかけ離れた厳しい現実であった。

女性は、日本軍ばかりでなく、人々や自分の意識下に潜む旧態依然とした封建意識にも苦しめられていたのである。女性からその二重の苦しみを取り除き、彼女たちを覚醒させなければ、女性を解放したとは言えないのである。まして、人民解放の事業に携わる延安解放区の間ですら、旧い道徳意識にとらわれ、女性を軽視している。覚醒したはずの女性自身でさえ、結婚を機に「家に帰ったノラ」となり、男性の「共犯者」となって、再び無自覚な「他者」となり生き続けていたのである。丁玲にはそれを看過することはどうしてもできなかったのである。

だからこそ、抗日戦が激化してきた40年代においても、丁玲はそれまで以上に、女性が男性の「共犯者」から脱却し、覚醒された「主体」として生きるとはどうことなのかを追求するべく、作品を書き続けたのである。

しかし、抗日戦争を勝ち抜くために人民を鼓舞するよりも、結果的に人民の弱点を暴露することになる作品を書き続けた丁玲の創作活動は、毛沢東により徹底的に糾弾された。

毛沢東は、丁玲ら一部の作家が民衆の欠点や弱点を暴露する「暴露文学」の存在を厳しく問題視し、1942年5月2日「延安文芸座談会」を開いた。この中で、「暗黒と光明の比重を同じにすべきではない。そして、民衆を脅かす暗黒を暴露し、民衆の革命闘争は必ず称賛しなければならない」<sup>24)</sup>と革命文芸家に文学作品のあり方について、繰り返して提起した。

当時の抗日戦争の激化という社会状況からいって、共産党員の丁玲は、共産党内部の矛盾や人民の封建的思想などを暴露してはならなかったのである。党員作家が書かなければならない作品とは、日本軍がどれだけ残虐で卑劣であるかを暴露し、人民の積極的行動を称賛するような内容でなければならなかったのである。

結局、丁玲は「延安文芸座談会」で毛沢東に激しく糾弾されたことで、自らも非を認め、徹底的に自己変革を図ることとなった。

## 七

丁玲は、文化大革命の後にあっても、『三八節に感有り』は悪文であったと自己批判し、欠点のある文章であった、と述べている。<sup>25)</sup>しかし、楊桂欣がこの作品を「革命内部の封建意識を批判した傑作であり、たとえ、封建主義の残存がなくなっても、この散文は永遠に消え去ることはない」<sup>26)</sup>と述べるように、現在、中国国内で丁玲の女性解放思想が再評価されている。

『夜』という作品は、これまで見てきたように、何華明を通して、無自覚な農民から覚醒したばかりの未熟な共産党指導員の農民が直面している、様々な苦しみをえぐり出した。それは、どうしても抜けられない工作のために、好きな農作業をなおざりにしなければならない苦悩であり、もはや欲望さえ抱けないが見捨てることもできない妻と暮らし続ける苦痛であり、若い女性からの誘いを理性により拒まなければならない苦悶である。そこには、林曉華、邱艶萍が述べるように、「農民が指導員として働く上での矛盾、新しい恋愛と愛のない旧い夫婦関係の矛盾、集団と個人の矛盾、政治理念と本能的欲望の衝突やそこに生じる困惑と苦悶」<sup>27)</sup>が描かれているのである。

また、男性の「共犯者」という立場から脱却し、女性が自らを奮い立たせ覚醒してこそ真の意味で女性が自我を解放できる、という丁玲の主張が様々な角度から描かれている。

何華明に自分の運命を託す妻は、男性の共犯者という立場に甘んじている。しかし、無自覚なこの妻は、この共犯関係を断ち切る術を知らない。だからこそ、たとえ自己犠牲になったとしても、共産党指導員の何華明は、彼女に救いの手を差し伸べてやらなければならなかったのだ。この男性との共犯関係は、覚醒した女性であっても、容易に断ち切ることはできない。したがって、男性との共犯関係を断ち切り、「他者」から「主体」へと立ち上がるためには、侯桂英のような肉体の奥底から湧き出てくる強い自我意識という原動力が必要となるのである。

馮雪峰は、『夜』について「過渡期の意識世界を完全に表現した、最も成功した作品である」と評している。

《夜》，我觉得是最成功的一篇，仅仅四五千字的一个短篇，把在过度期中的一个意识世界，完满地表现出来。体贴而透视，深细而简洁，朴素而优美。新的人民的世界和人民的新的生活意识，是切切实实地在从变换旧的中间生长着的。<sup>28)</sup>

丁玲は、党の方針に従うべき黨員としての任務と女性の自我解放を切に願う欲求の狭間で葛藤し続けた。この『夜』には、社会全体の解放を願う共産黨員としての立場と、女性の自我解放を願う文学者という立場の間であがき続けた、丁玲の思想的苦悶が描かれているのである。それらは、覚醒したばかりの共産党指導員である何華明という農民の眼を通して語られており、無自覚な妻や覚醒した侯桂英に対する思いを「同情するが鋭く見抜き、細密だが簡潔で、素朴だが優美」に描くことで、丁玲の女性の自我解放への願いが切実に表現されているのである。丁玲のこの思想的苦悶は、抗日戦争という極限状態の中で、自我解放という人間の根元的な問題に取り組んで生まれたものであるからこそ、現在に至ってもなお普遍的な問題を提起しているのである。

注

- 1) 丁玲「夜」、『解放日報』、1941年6月（『丁玲全集』河北人民出版社、第4巻）、255頁
- 2) 単元「歩入一位“新人”の心靈幽宮—読丁玲の《夜》」（『咸寧学院学报』第24巻、2004年）、57頁
- 3) 黄正林「抗日戦争時期陝甘寧辺区の社会生活」『中共党史研究』第6期、2008年
- 4) 丁玲「夜」、前掲書、257-258頁
- 5) 1928年2月に『小説月報』に発表された小説。
- 6) 1941年6月に『中国文化』に発表された小説。
- 7) 江上幸子「毛沢東の「新中国」における「人民・家庭・女性」—丁玲の『夜』再読—」2003年（『ペンをとる女性たち』フェリス学院大学編、翰林書房）、188頁
- 8) 丁玲「夜」、前掲書、259-260頁
- 9) 秦弓「丁玲前期創作的女性主義闡釈」『中国文化研究』17期、1997年、99頁
- 10) 単元、前掲論文、59頁
- 11) 「夢珂」の夢珂、「莎菲女士の日記」の莎菲、「阿毛姑娘」の阿毛、「母親」の曼貞、「新しい信念」の老婆、「霞村にいた時」の貞貞など。
- 12) 丁玲「夜」、前掲書、260-261頁
- 13) 江上幸子、前掲論文、197頁
- 14) 1930年に『小説月報』に連載された長編小説。
- 15) 中島みどり「丁玲の軌跡」、1981年（『丁玲の白伝的回想』朝日新聞社、1982年）、259頁
- 16) 丁玲「“三八節”有感」『解放日報』、1942年3月（『丁玲全集』河北人民出版社、第7巻）、60頁
- 17) 王周生「丁玲創作中女権思想的衰変」『上海社会科学院学术季刊』、第3期、1993年、182頁
- 18) 丁玲「“三八節”有感」、前掲書、61-62頁
- 19) ボーヴォワールは「女は男を基準にして規定され、区別されるが、女は男の基準にならない。女は本質的なものに対する非本質的なものだ。男は〈主体〉であり、〈絶対者〉である。つまり、女は〈他者〉なのだ」と述べている。「主体」は、自らを本質的なもの、主たるもの、基準となるものとして定め、能動的に行動するものであり、「他者」は非本質的なものであり、「主体」に左右されて、受動的にしか行動出来ない「即自存在」をいう。  
ボーヴォワール『第二の性』、1949年（井上たか子、木村信子監訳『決定版 第二の性 I 事実と神話』新潮社、1997年）、11頁
- 20) ボーヴォワール、前掲書、16-17頁
- 21) 丁玲「“三八節”有感」、前掲書、62頁
- 22) 中島みどり、前掲書、253頁
- 23) 丁玲「我所認識的瞿秋白同志」『文滙増刊』、1980年（『丁玲全集』河北人民出版社、第6巻）、53頁
- 24) 毛沢東「在延安文芸座談会上的讲话」『解放日報』、1943年（『毛沢東選集』人民出版社、第3巻）、871頁

延安解放区における作家の苦悶

- 25) 丁玲は、1942年6月に「文芸界対王実味應用的態度及反省」という文章の中で、「“三八節”有感」について、「立場と思考方法に問題があり、悪い文章であった」と述べ、1980年の「解答三個問題」においても、なお、「あの文章には欠点がある」と述べている。
- 26) 楊桂欣「論丁玲的雜文」『文芸理論与批評』第6期、2000年、88頁
- 27) 林曉華、邱艷萍「《夜》：一個典型個案的心理解析」『西南民族学院学报・哲学社会科学版』第23卷第12期、2002年、57頁
- 28) 馮雪峰「從《夢珂》到《夜》——《丁玲文集》後記」『中国作家』1948年（『三八節有感』北京广播学院出版社）、76頁

(あいほら・さとみ 国際言語学部講師)

